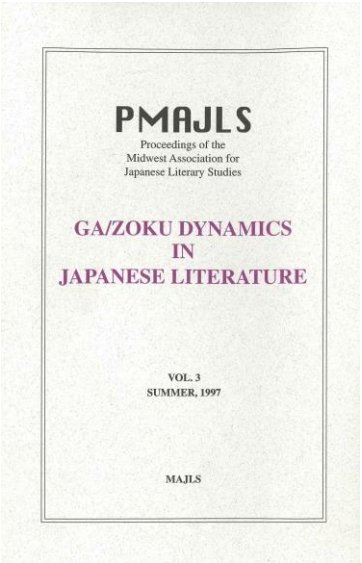
江戸時代の文芸家と禄高
“Salaries of Men of Letters in Edo Period”

渡辺憲司 Watanabe Kenji

Proceedings of the Midwest Association for Japanese Literary Studies 3 (1997): 39–48.



PMAJLS 3:
Ga/Zoku Dynamics in Japanese Literature.
Ed. Eiji Sekine.

江戸時代の文芸家と禄高

渡辺憲司
立教大学

（1）

文芸家という言葉は曖昧な表現である。ここでは、儒学者・漢詩人及び国学者・和学者とも呼ばれた連歌師・歌学者さらに画家等のことを指している。彼らが藩からどのような待遇を受けていたかを残存する分限帳などにより調査してきたが、本稿はその中間報告である。

この試みに大きな問題点が存していることを、最初に指摘しておく。

藩からの待遇は具体的には藩主から給付される禄高という形をとるが、禄高のみによって処遇が決定されているわけではない。禄高が低くとも、高い官位が与えられたり、席次に高い位置が与えられて、＜名誉＞を得ることもある。又役職期間中に臨時的に給付される禄高や一代限りを原則とし能力に応じた役禄もある。禄高つまり家禄は、個人に与えられるというよりも、家に与えられるものである。先祖代々保持して変わることのない家禄は継承者が如何に能力が低くても代々給付され、原則的にそれ程変化することはない。又新規召し抱えの待遇を考える時、江戸時代という長い期間では禄高の平均も当然変わってきている。召し抱え時の経済状況や人材の登用をはかった前半と雇用の固定化した後半での相異もある。出来得る限りこれらの問題点を踏まえながら、話を進めていくつもりではあるが、かなりおおざっぱな言い方にならざるを得ないものになった。

おおざっぱな言い方は誤解を招くかもしれない。それでもなお、誤解を恐れずに問題提起としたのは、江戸時代の多くの文芸家が、禄にこだわっていたからである。それはもちろん江戸時代の人だけではない。我々にとっても、俸給がいくら支払われるかが、各人への評価の大きな目安である。文学的評価そのものは残された作品にある。又、文芸家への評価も、処遇や禄高によってのみ左右されたものでないことは、もちろんである。しかし、江戸時代、家禄といった形で代々給付された給与は、藩における上下関係を如実に示したものである。

若い時から天才の名をほしいままにした山鹿素行（貞享2年(1685)没)も、仕官に際して禄高にこだわった人物の一人である。彼は自分の履歴を記した『配所残筆』の中で、200石さらに700

石の誘いを断り、1000石で浅野家に仕官している。禄高が自己の才能を評価する大きな尺度であったことは事実である。

今回のテーマである、雅俗の問題に即してこの問題を考えようとしたのは、江戸時代の<雅>の様相が、この関係を考えることでいささか明らかになるかもしれしれないと考えたからである。

江戸時代の文学史研究において、<雅俗>の問題設定を積極的に取り入れようとしたのは、中村幸彦氏である。氏の見解の根底にあったのは、平安時代の文学が貴族文学と呼ばれる、江戸時代の文学が平民文学といった呼ばれ方をしていることに対する疑問である。昭和15年(1940)という早い時点（『書物』137号）で氏は、江戸文学の担い手そのものは平民などと呼ばれる庶民ではなく、そのほとんどが士分といった、武士の中でも家禄を得ている身分的にも安定した人物達であったと述べている。さらに戦後、氏は、江戸文学の庶民性を殊更賞揚した唯物史観の文学史家が、俗を自立的性格を有したものであると捉えとに疑問を投げかけた。氏はその後、もっぱら雅俗の設定が表現様式に関わる問題であることを強調され、雅を中心とした第一文芸、俗を中心とした第二文芸という言い方もされた。氏の代表的な論<戯作論>も、俗は雅の中から出たものであるといった図式に集約されたものである。

雅俗というテーマに対して、ここで考えようとすることは表現様式の問題ではない。中村氏の最初の問題提起に立ち戻ると言ってよいかもしれない。この調査を通じて家禄を得安定した生活を送っていた士分（文芸家）が、藩内においていかなる位置を有していたかを浮かび上がらせる手がかりになると考えたからである。

家禄を受けていた儒者・国学者・絵師は、江戸時代の各藩の<雅文芸>の重要な担い手であった。彼らがどのような評価を受けていたか。そこには、雅の階層の様相を見ることが出来るはずである。

（2）

各藩の雅文芸のもっとも中心的存在は言うまでもなく儒学者達である。

儒学者として新規召抱え時の給付の石高が100石を越えるものをあげておく。新規の召し抱えを例としたのは、新しく藩が抱える際の石高がその藩の姿勢をもっともよく示しているからである。

全ての藩の調査を終えているわけではないが、高い禄高の召し抱えとしては、先にもふれた承応元年（1652)赤穂藩に召し抱えられた山鹿素行の1000石や、500石で和歌山藩に召し抱えられた那波活所(正保5年(1648)没)の例もあるが、これらはかなり早い時期の例であり、全体的には高禄といわれるものでも多くは300石くらいである。

300石で召し抱えられた例は、仙台藩の内藤閑斎（元禄5年(1692)没）、同藩の桑名松雲（享保6年(1721)没）、会津藩の横田三友（元禄15年(1702)没）、加賀藩の太田錦城（文政8年(1825)没）、久留米藩の真部仲庵（宝永2年(1705)没)、大聖寺藩の河野通英（延宝三年没（1675）)などがいる。熊本藩の秋山玉山（宝暦13年（1763)没)は、知行100石に加えて、役料200石であった。

200石で召し抱えられた例としては、会津藩の友松氏興（貞享4年(1687)没)、同藩の松本重文（宝暦8年(1758)没)、津藩の斉藤拙堂（慶応1年（1867)没）、津阪東陽（文政8年(1825)没）、大聖寺藩の松浦霞沼（享保13年(1728)没）、柳川藩の安東省庵（元禄14年(1701)没)、岡藩の唐橋世済（寛政12年(1800)没)等がいる。黒石藩の上田与五郎（元治2年(1865)没）は、180石、 大聖寺藩塩川伊右衛門（元禄6年（1693)没）は、150石、対馬藩学校師であった塩川伊右衛門（元禄6年（1693)没）は、大坂の人であるが、新規150石である。久留米藩の樺島石梁（文化10年(1827)没)は、130石、三春藩の倉谷鹿山（寛政8年(1796）没)は、100石、熊本藩の大城多十郎（文化8年（1811)没)は、100石、人吉藩の東白髪（文政12年（1829）没）も、100石からの新規召し抱えである。

石高があがっていった例としては、黒石藩の畑井多仲（嘉永3年(1850)没）は、1人扶持から、30石、60石と累進している。和歌山藩の仁井田南陽(嘉永1年(1848)没)は、3人扶持から後に250石となっている。秋月藩の原古処（文政10年（1826）没)は、養子となり家督を相続して4人扶持14石後に100石である。福岡藩の貝原益軒(正徳4年（1714）没)で浪人から新規6人扶持となり、後に300石までになっている。同じく、福岡藩の竹田春庵（延享2年（1715）没)も、新規6人扶持から、後に300石である。さらに、同藩の月形質（天保13年（1832）没)は、天明1年(1781)に料理方の家業を継ぎ、家禄10石3人扶持であったが、同6年に家業を替えて儒者方となり100石となっている。岡藩の角田九華（安政2年（1855）没）は、2人扶持で句読師となったが、後に侍講、

由学館教授となり、260石である。会津藩の蓮沼儀右衛門（宝永3年（1706）没）は、父も儒者で家禄12石2人扶持であったが、後には100石、同藩の山崎忠央（享保19年（1734）没)も、30人扶持で、侍講の職はそのままに大目付となり、400石にまでなっている。

石高の累進を許さなかった藩もある。長州藩では、儒者の石高は、100石以下又は30石以下と定められている。荻生徂徠(享保13年(1728)没)にその絵が激賞され、書家としても知られた佐佐木縮往（享保18年(1734)没)が、山縣良斎(享保8年(1723))とともに、儒学掛御用になった時、元禄11年(1698)の分限帳には、75石と記されている。又、明倫館の初代学頭をつとめた小倉尚斎(元文2年(1737)没)以来、藩の儒学の筆頭の家柄を維持した小倉家も77.5石である。同藩の山田原欽(元禄6年(1693)没)は、若くして京都文壇にもその名がよく知られていた儒者である。彼の扶持は、延宝7年(1679)14歳の時、吉就新規に召し抱えられて、10人扶持であった。その後死ぬまでの間加増などの記事はないが、死後、『山田家系図』には山田家に対して知行高100石が与えられたとある。山田原欽の生前の儒者としての功績が認められたものである。これは長州藩では異例であった。

（3）

儒学者に比較すると、国学者・和学者の禄高にそれほど高下の差はなくほとんどが低く抑えられている。

久保田藩の国学者で日知館和学取立係となった大友直枝（文政12年（1829)没）は神主の家柄であった5人扶持の新規召し抱えであった。同藩の国学者で幕末の国学に大きな影響欲を与えている平田篤胤（天保14年（1843)没）は15人扶持（新規）であった。又著名な本居宣長（享和1年(1801)没）は、始め小児科開業医であったが、寛政4年(1792)5人扶持で和歌山藩に召し抱えられ、寛政6年10人扶持の針医格となっている。又、宣長の養子、本居大平（天保4年（1833)没）は、3人扶持で家督相続し、侍講となり累進し25石であった。熊本藩の国学者伊形霊雨（天明7年(1787)没）は、百姓の子として生まれ天明5年に5人扶持15石で召し抱えられている。同藩の学校目付であった長瀬真幸（天保6年没（1835)）も国学者としてよく知られ100石を得ているが、これは父が歩小姓として100石を得ていたのが隠退した後の出仕である。福岡藩の青柳種信（天保6年（1835）没)は、家督を相続して6石3人扶持で国学家業城代組であったが、『筑前国続風土記拾遺』編纂の功により、8石4人扶持となり、後には11石4人扶

持となっている。

近代教育史の一翼を担った長州国学の歴史について触れるものは少ない。殊に長州藩国学の基軸的存在であった安部家について本稿で触れるのが最初の記述であろうと思われる。

寛文12年(1672)12月の『毛利11代史』の条に、萩の町人吉左衛門が、明年より御城連歌に陪席するようにと命が下っている。この吉左衛門が、安部春貞（元禄11年(1698)没）である。同史の延宝8年(1680)には和歌を吉川惟足に学び、古今集の秘伝を受け、連歌宗匠を命じられたと記されている。防府の毛利報公会、毛利家文庫所蔵の連歌集の中に、1月12日定期的に行われた、御城連歌が存しており、延宝2年(1674)から元禄7年(1694)に至るまで、ほぼ毎年、春貞の句が、約8～10句ほど出ているのを確認することが出来る。その後も、安部家は子孫が代々連歌宗匠を継いだ。春貞の子孫信貞（享保7年(1722)没）は御伽役、和貞（宝暦12年(1762)没）は、毛利家系譜の調査にあたり、毛利密用方の創始に関わり、又真貞（明治26年(1893)没）は、宮内省御歌所御用係となっている。200年以上にも渡り安部家は萩国学の中心的役割を担ったのである。春貞は延宝年中、毛利綱広に召し出されて、禄を受けたのであるが、その禄高は明確にされていない。しかし、安部家の石高については、『もりのしげり』には、「連歌師　阿部氏世々襲系たり」とあり、嘉永5年成立の分限帳には、「高54石　寺社組連歌師　安部諒」とある。これにより、安部家の石高は50石程であったと、考えることが出来る。長州藩の儒学者が低位に抑えられていることから考えると比較的優遇されていたとも考えられるが、諸藩の状況から考えると平均的である。

同藩の明倫館の国学教授として活躍し、後に明治天皇の教育係であった近藤芳樹は安部家に比較すればよく知られた存在である。近藤芳樹(明治13年(1880)没)は、周防国吉敷郡小郡岩淵の百姓源吉の長男として、享和1年(1801)に生まれた。初め漢学を猪飼敬所・原古処から学び、国学は周防宮市の松崎神社の宮司鈴木直道に学んだ。さらに、文政6年(1823)、上阪して村田春門の門に入り、さらに、翌年紀州に赴いて、本居大平に学び、又京都では山田以文に有職を学んだ。その後、一時広島にあったが、天保11年(1840)藩主、毛利敬親に萩に召し戻され定住し、翌12年近藤氏を継いで、43石を得た。そして、家塾妙宗寮を開き、萩藩国学興隆の基を作り、元治1年(1864)に藩校明倫館の国学教授として招聘された。そして、維新後は藩の歴史編纂の職にあっ

たが、明治8年(1875)に宮内省に出仕して宮内省歌道用掛、9月には、同文学用掛となり、同年の明治天皇の東北・北陸の巡幸にも従っている。

国学者関連の処遇として異例であったのは、仙台藩である。猪苗代兼与(生没年未詳)は、初代伊達政宗(寛永13年(1636)没)の代に500石を受け、又、伊達藩の代々連歌師であった、石井了宣（享保17年(1732)没）は、280石を受けている。幕府のお抱え連歌師のの里村紹巴が、100石であるから、これは破格の例というべきものである。先に触れたように儒学者の累進、厚遇で注目すべき会津藩においても、日新館の和歌師範であり、歌人としても知られた沢田名垂（弘化2年(1845)没)は家督相続して14石を得、後に和歌師範としての功績が認められたが、石高は22石であった。

（4）

画家、歌人、儒者は、宝永6年(1709)の長州藩の給禄台帳によると、医師、能太夫などとともに特殊技能を持った者として寺社奉行の中に組み込まれている。長州藩において、儒者は後に寺社奉行支配から離れることもあった。諸藩においても同様の変化が見られるが、基本的には技能集団として遇されていたのである。

長州藩における画家の処遇は異例である。長州藩の絵師は、はじめ毛利輝元に仕え、雪舟画系を再興させた画家一門雲谷家が担っていたが、宗家には360石、別家には260石併せて500石以上もの石高を給付した。戦国期毛利氏以来、雪舟の後継という名門の家柄ということや、絵師として最高の地位にあった幕府の奥絵師、狩野探幽(延宝2年(1674)没)の250石と比較しても、これは破格の待遇である。やはり戦国期の名門海北友松の流れをくむ、中津藩海北友倩（享保3年(1718) 没)は、100石である。松前藩の蠣崎広年（文政9年(1826)没）は波響と号して円山応挙に並び称され、松前応挙等とも呼ばれた著名な画家であるが、500石の石高は家老職としてのものであり、比較の対象にはならない。

例をもう少しあげると、松前藩の熊坂適山（元治1年(1864)没）は奥州伊達村保原の農家に生まれ、天保15年(1844)、適山49歳の時、松前藩に招聘され150石で新規召し抱えとなり、さらに又、いったん職を辞し再仕した時も、150石を与えられている。これなどはかなり厚遇された例である。他に新規で100石以上の扱いを受けた画家としては、狩野探幽の随一の門弟で、多くの大名

からの招聘を受け、会津藩に新規で召し抱えられた加藤遠沢（享保15年(1730)没）の100石、矢野家初代として熊本藩に召し抱えられた、矢野吉重（承応2年（1653）没)の石高150石などがいる。新規召し抱えとしては、秋月藩の斉藤秋圃（明和6年（1861）没）の3人扶持12石、小倉藩の高木豊水（安政5年(1858)没)の銀5枚5人扶持、中津藩の片山九婉（文化9年(1812)没)の7石5斗2人扶持で後に15石3人扶持となった例などが、絵師としては、一般的な石高である。久留米藩の御用絵師三谷永伯（元文4年(1739)没)は、家格12石3人扶持であったが、久留米城の修築に金屏風を描き、その功績によって、正徳5年、80石を受け後には、100石の加増を受けている。ほぼ100石というのが、絵師としての限度といってよいようだ。

（5）

全ての藩の文芸家の石高を調査し終えていないままに結論めいたことを言うのは慎重を要するが、以下、3点のことは言えそうである。

1、各藩によって文芸家への処遇が異なっている。

2、総体的に国学者・和学者の禄高は、儒学者・漢詩人又画家よりも低い。

3、明治以来、近代化の指導的役割を果たした長州藩の文芸家の禄高は画家に特別高い禄高を与えながら、儒学者には低い禄高しか与えていなかった。

1に関連して、言い添えると、この状況は藩の大小とは関係がないようである。先に人名だけ挙げたが黒石藩の上田与五郎（元治2年(1865)没）は、昌平校で修学の後、藩儒となり、藩校経学教授所の藩儒となり、その禄高は180石であるが、黒石藩は津軽藩宗家から文化六年、5000石を分与され10000石を領し諸侯に列した小藩である。

又、仙台藩の連歌師や、長州藩の画師に対する扱いも特異なものであり、如何なる文芸家を重視するかも各藩によって異なっていたのである。藩主の好みによってや、各藩の伝統的価値観が左右した結果であろうが、文芸に対する観点が各地域によって個性的なものであったとも言い得るであろう。

1のことを前提としながらも国学者・和学者の禄高は、ほぼ50石前後が高禄であり、儒学者・漢詩人又画家よりも低い評価であったと言い得るであろう。藩主の文芸への関心が高かった加賀藩でさえ、浅加通郷（享保12年(1727)没が、「徒然草諸抄大成」を、前田綱紀に寄贈した時、綱紀は、力を聖典に用いずに、

かくの如き雑書に弄するのは惜しいことだと評価しなかったいう話が伝承されているが、儒学に対する国学の劣位性は石高の面からも明らかなことである。

国学が復権するのは近代における天皇専政政治の確立以降である。明治維新以降、学校教育の整備は近代化促進のために多くの成果を上げたが、藩教育の担い手は儒学者から教師に変わり、全国に一律の基準を持つ学校教育体制が整備された。その結果儒学者の多くは多くはその職を失い、又一部は学校教育の体制に組み込まれていくが、順応することは困難であった。

例えば、郡上藩の藩校文武館の教授であった入山謙受（明治25年没(1892)）は、明治2年(1869)に新規80石で召し抱えられているが、明治4年藩校廃止となり私塾を創設する。しかし明治6年八幡小学校が開校すると教諭となる。しかし、新しい教育体制についていけなかった彼は、明治8年早々に辞職し、私塾を再興している。新体制への彼の不満は、国学重視で画一化された教育と俸給の安さであった。

近代になってからの文芸の価値観の均一化と教育者への俸給の安さは、3にあげた長州藩の状況とも関連することである。先に近藤芳樹の例をあげたが、50石の禄高のものが、明治天皇の教育の一端を担ったことは十分注意されてよいことである。因みに長州藩では能太夫は130石、狂言師は65石、馬医は80石が給付されている。国学者はそれ以下ということになる。他藩の処遇も大同小異である。

現在、日本文学史研究の中で、雅の価値観の最高位に位置するものは「源氏物語」であり、「古今集」である。たしかに、江戸文学の最高傑作として評価の高い「好色一代男」が、源氏物語を踏まえ、形式的ながらも古今伝授も継承され、佐賀藩の山本常朝（享保4年(1719))没が、古今伝授を藩主に斡旋しその成功の功により、125石を給されたといった逸話も伝わっている。

しかし、禄高から見た江戸時代の諸藩の文芸家の評価を踏まえるならば、文学史研究があまりに無批判的に、＜雅＞の象徴的存在として源氏物語や古今集の価値を過大評価することは誤りを生むであろう。少なくともその価値観が、近代における公（国家）教育のもとの均一化、国学重視、さらに教科書における国語科目・国語教育の設定といった政治政策にともなう、文芸の没個性化状況と引き替えに得たものであることは留意する必要があろう。

中間報告と言いながら、先走ったことを述べすぎたようであ

る。幕府内の状況や長州とともに近代教育の重要な役割を果たした薩摩藩の状況を加味しながら再考してみたい。

追記。薩摩の禄高を「三百藩家臣人名事典」（新人物往来社1989年）・「島津藩分限帳」（宝暦5年差出分・寛政1年写）・「薩州御家中諸役付」（天保14年写）・「薩摩宰相御藩中附留」（文久2年写）・「嘉永4年　薩州武鑑」などによって調査したが、文芸家の状況を確認することが出来なかった。調査不十分と思われるが、薩摩の文芸家に対する処遇とも関連することなのかもしれない。大方の御示教を得たい。

猶、本稿はｲﾝﾃﾞｨｱﾅ大学共同研究員として、1997年11月に招聘された際にまとめたものである。ｲﾝﾃﾞｨｱﾅ大学のｽﾐｴｼﾞｮｰﾝｽﾞ教授・同大学高等教育研究所ﾃﾞｨﾚｸﾀｰ、ｼﾞｪｰﾑｽﾊﾟﾀｰｿﾝ教授・同ｱｼｽﾀﾝﾄﾃﾞｨﾚｸﾀｰ、ｲﾎﾞﾅﾍﾃﾞｨﾝ氏の御協力に御礼申し上げる。又、本稿は同大学ﾘﾁｬｰﾄﾞﾙﾋﾞﾝｼﾞｬｰ教授の著書『私塾』（1979年ｻｲﾏﾙ出版会)に多くの啓発を受けた。付記して御礼申し上げる次第である。

Excerpt

"Salaries of men of letters in Edo period"
Watanabe Kenji (Rikkyō University)

A variety of men of letters, who were hired by different local lords, were the main sources in the formation of Edo literature. A comparative study of their salaries will allow us to shed a new light on complex conceptualization of "high literature" in Edo period.

Among Confucian scholars, Yamaga Sokō was paid exceptionally highly (1000 goku) by the Akō clan, while most Confucian scholars' salaries range between 100 and 300 koku. In Chōshū, the top scholar family, Ogura, was paid a total of 77.5 koku. Shintoist scholars and waka/renga masters were generally paid low. Hirata Atsutane was paid by the service of 15 men, while Motoori Norinaga was only served by 10 men; his son was later paid 25 koku. In Chōshū, a renga master family, Abe, was hired for 50 koku, while Shintoist scholar, Kondō Yoshiki, who

was later in charge of Meiji Emperor's education, was originally hired by the Hagi clan for 43 koku. The Date clan paid exceptionally highly: Shintoist scholar, Inawashiro Kenhō, was paid 500 koku and the renga family, Ishii, was paid 280 koku. As for painters, Chōshū paid exceptionally well: its painter family, Unkoku, received a total of more than 500 koku: this amount is double of what the famous painter, Kanō Tan'yū, who was hired by the Tokugawa government, earned. Most painters were hired for about 10 koku.

Thus, on the one hand, there was quite a diversity according to different clans. On the other hand, there was a general tendency for Shintoist scholars and waka/renga masters to be paid less than what Confucian scholars, Chinese poetry masters, and painters were hired for. This indicates that Shintoist studies and traditional Japanese poetry and narrative--often symbolized today by Kokinshū and Genji monogatari--were not considered as high literature by the literary institution at large in Edo period. Today's concept of ga, or high literature, is a product of a nationalistic revalorization of traditional literature, together with homogenization of national education, which have been massively practiced from Meiji period on. A study of Edo literature from our standpoint indicates that contrary to what we tend to believe, the concept of ga during the Edo period and the notion understood today display discontinuity rather than continuity and similarity.